

【注釈】

『古本説話集 全注釈』大齋院事^{（おほむけいんじやう）}（第二）

其の一（五丁オ1～六丁オ7）

Kohonsetsuwashu Zentyusyaku Oosaiinnokoto : I

Fumi SHIIBA
Motoko ABE
Reiko KAWANAMI
Fumiko NAKAMURA
Yoshikazu FUKUDA
Yasuko YAMAGUCHI

椎葉 富美
安倍 素子
川浪 玲子
中村 文子
福田 益和
山口 康子

要約

『古本説話集』は、編著者未詳、成立は平安末期から鎌倉初期と言われている古写本である。唯一の伝本である旧梅澤記念館蔵鎌倉中期写本（現東京国立博物館所蔵）には、題簽も内題もないため、本来の書名は不明であり、一般に『古本説話集』と呼ばれている。

流麗な平仮名文で、大齋院選子内親王の話に始まり、関寺の牛仏の話で終わる。王朝文学の著名人を中心に樵夫や貧女の話に至るまで有名無名人の逸話や観音靈驗譚などが収められている。『今昔物語集』以下の諸説話集との共通説話も多いが、書承関係は明らかになっていない。

本稿は、『古本説話集』の「注釈」を試みるものである。「大齋院事（第一）其の一」として、まず巻頭の「大齋院」の説話から着手し、順次全七十話の「注釈」を試みる予定である。「注釈」に先立って、漢字表記の「目録」について述べ、該当部分の「目録表題」を訓読する。「本文」は、原文に復元できることを目指す一方、読みやすさを考慮し、比較の便のため、「対照説話」を本文の下段に記した。「口語訳」は、平易かつ明確な現代文を心がけ、原文の雰囲気や伝わることを意識した。「語釈・語法」は「注釈」の根拠を示し、特に日本語学的視点を多く取り入れるように心がけた。さらに「補説」として、「注釈」における重点箇所を特記した。今回は、村上天皇の皇女選子内親王、すなわち大齋院の賀茂祭の行列の時の逸話を取り上げ、「其の一」として、冒頭から二十七行分を対象とする。

キーワード 古本説話集・大齋院・賀茂祭

解題

『古本説話集』（以下、「本集」と略称）は、昭和二十四年「新指定国宝展」で世に知られた。翌年、梅澤彦太郎氏の所有に帰し、以来、題簽も内題もないため『梅澤本 古本説話集』と称されることが多い。梅澤記念館・文化庁旧蔵、現在は東京国立博物館所蔵である。

本書の書誌等については、『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編、貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）の田山方南氏の解説、および『梅澤本 古本説話集』（古典資料類従六・勉誠社・一九七八年）の川口久雄氏の解説に詳しい。墨付全部一三六丁。奥書識語はなく、冒頭二丁オ一四丁オ、および六〇丁ウ一六一丁ウに、目録（漢字表記の表題を本文の説話配列に従って列記したもの）がある。全七十話が、前半四十六話、後半二十四話に二分され、一般に前半を上巻、後半を下巻と称されている。

本書の説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と共通のものが多い上、『世継物語』『打聞集』などの小説話集との重なりも多く、類縁性や前後関係が論じられてきた。しかし、諸説話集の伝本の一つ、あるいは異本・抄本とは考えにくく、また、どの説話集とも相互の承接関係は証明されず、それらの諸説話集との共通祖本が想定されている。現在のところ、天下の孤本とみるべきである。

成立年代、編著者（筆録者）、成立事情等は不明であるが、『古本説話集総索引』（山内洋一郎編・風間書房・一九六九年）の刊行以来、日本語史的な観点からの研究も進められている。鎌倉中期筆写と思われる貴重な古写本である。

目録について

説話集には、説話本文とは別に目録や説話表題(説話本文の前に記載された表題)が付されているものが多い。本集には、巻頭および中間に目録が置かれている。原本の形に沿って注釈を加えるとするれば、まず冒頭の目録を訓み下し、解説すべきであるが、今回は各目録表題をそれぞれの説話の冒頭に置いて訓みを付すこととする。「注釈」に先立って、目録についての見解を述べる。

目録は本文の内容を知るための指標としての機能があり、本文と同じく研究の対象となるべきものであるが、これまで本文研究に比して、まともな考察することがほとんどなかった。その理由を考えてみると、

- (i) 目録は、説話本文の付録としての認識が強く、便宜的に取り扱う態度があること。
- (ii) 目録の作成者が本文の編著者と同一とは限らず、別人(同時代あるいは後代の人)と考えられるものもあること。
- (iii) そのためあって、目録と説話本文との間に齟齬が生じ、その指標としての機能が問題になること。

以上のことから、これまでの諸家の注釈書等を見ても、目録や説話表題そのものを全体として眺め、その内部構造・説話本文との関係・目録作成者・説話表題の訓み等を考察したものはほとんどない。『梅澤本 古本説話集』(掲書:「解題」の項)の川口久雄氏の解説(P.285)には、数例の訓み方が示されている。しかし、目録が作品に載せられている以上、それを等閑視する態度は正しいとは言えない。このような立場から、目録および説話表題を対象として、改めて研究の視点をもって眺めることにしたい。

さて、本集は原本六〇丁のところを前後に分かれ、説話本文(全七十話)は、前半(四十六話)・後半(二十四話)の構成となっている。そして、前半・後半そ

(四)

それぞれの冒頭に、目録が記載されている。この二つの目録について、先に述べた、その内部構造・説話本文との関係・目録作成者・目録表題の訓み等について、いくつかの見解を公にした¹⁾。その要点を述べると、

- (a) 前半の目録には比較的単純な目録表題(人名+事)・「人名(和歌) 事」などが多く、後半の目録には、文構造の上で、主語・述語・目的語等を具備する、より長く複雑な表題が多いので、訓読上注意が必要である。
- (b) 変体漢文を基調とする本目録の表題を訓読するにあたり、対応する説話本文の表現を基本にして、他の説話集(『今昔物語集』・『宇治拾遺物語』など)等の表現も参照して、特に補読の仕方(時制の助動詞、待遇表現)や、ノ・ガ両助詞による尊卑表現の区別を明確にする。
- (c) 目録の作成者は、対応する説話本文の内部徴証よりみて、本文の編著者とは別人、それも後代の人であると考えられる。

これらの知見をもとに、本集の二つの目録にみられる表題を明確な基準のもとに訓読していくことにする。

本集には、説話表題は見られないので、それぞれの該当説話本文の前に目録表題を掲げ、訓読した形で示す。

【注】・古本説話集目録の性格と訓読

(山口康子、福田益和、「国語学会」口頭発表・一九七二年五月)

・古本説話集目録訓読についての一問題 古本説話集の場合

(山口康子、福田益和、「解釈」一九七二年十一月)

・古本説話集「目録」訓読についての一視点 人物を「ける」のが

なお、本集「目録」の数少ない先行研究には、児玉識氏の「中世説話集の文献学的考察

梅沢本古本説話集を中心にして」(『宇部工業短期大学高等専門学校研究報告』一巻二号・一九六四年)がある。また、森正人氏の『古代説話集の生成』(笠間書院、二〇一四年)の序章・第一章に、説話集における目録・標題の役割について、言及・指摘がある。

凡例

解題

本集の概要について述べる。

目録について

本集に付されている「目録」について述べる。

一 表題

本集には、説話表題（説話本文の前に記載された表題）は見られないので、目録表題をそれぞれの該当説話本文の前に掲げ、訓読を振り仮名の形で示す。その根拠については、各説話の口語訳の次に、項目を立てて述べる。また、川口久雄校訂『梅澤本 古本説話集』（岩波文庫・一九五五年）以下の註釈にならない、説話の電話番号を（ ）をつけて付し、（第一）（第二）の形で示す。

二 本文

- 1 底本は、東京国立博物館所蔵（梅澤記念館・文化庁旧蔵）『古本説話集』を用いた。『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編、貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）、『勉誠社文庫124 古本説話集』（川口久雄解説・勉誠社・一九八五年）、「e 國寶 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財」（<http://www.emuseum.jp/top?lang=ja>）を参照する。
- 2 底本の二丁を二頁として、表をオ・裏をウと表記し、行数を本文の上に算用数字で記す。なお、勉誠社文庫の頁数を（ ）で示す。
- 3 原文の漢字はそのまま漢字で表記し、原文に近い字体を選ぶ。
- 4 訓みをつけるときは、歴史的仮名遣いを用い（ ）で囲む。
例 大齋院（おほむらび）・申は（まは）
- 5 反転記号・繰り返し記号・見せ消し等は原文どおり表記し、必要に応じて注をつけるか、「語釈・語法」の項で説明する。
- 6 原文の仮名表記を、漢字表記にするときは、振り仮名として原文の仮名をつける。表記する漢字は、現行の漢字とする。
例 大殿（おほの）・齋院（さいいん）
- 7 仮名遣いは、右側に正用を【 】で示す。
例 なを
- 8 必要に応じて句読点・濁点・引用符をつけ、会話文には「。」をつける。

三 対照説話

対照すべき説話を、本集本文の行切りに合わせて記載する。テキストは、『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』など一般的なものを選ぶ。

四 口語訳

逐語訳を心がけ、必要に応じて適宜主語等を（ ）で補つ。

五 語釈・語法

丁の表（オ）・裏（ウ）ごとに、該当箇所の行数を算用数字で示し、特に日本語学的視点を取り入れるよう心がける。

六 補説

特に詳述する必要がある問題についての考察を記す。

七 類話

紙幅の都合上、各話の末尾につける予定である。

八 参照テキスト

略号とテキストは次のとおりである。

- 岩波文 『梅澤本 古本説話集』川口久雄校訂・岩波文庫・一九五五年
全書 『古本説話集』日本古典全書・川口久雄校註・朝日新聞社・一九六七年

- 総索引 『古本説話集総索引』山内洋一郎編・風間書房・一九六九年
全註解 『古本説話集全註解』高橋貢・有精堂・一九八五年
新大系 『古本説話集』新日本古典文学大系42『宇治拾遺物語』と併録・中村義雄・小内一明校注・岩波書店・一九九〇年

九 参考文献

全訳注 『古本説話集 上下』高橋貢全訳注・講談社学術文庫・二〇〇一年
参考にした文献については、できる限りその部分に書き入れる。記載できなかったものは、各話の末尾につける予定である。

大齋院事 (第一)

【五丁才】(一三三頁)

- 1 今は昔、大齋院と申は、村上(むらかみ)の十(じゅう)の宮(みや)に
 - 2 おはします。御門(みかど)の、あまたたび、替(か)はらせ
 - 3 給へど、この齋院(さいいん)は、動き(うご)きなくしておはしし
 - 4 けり。齋宮(さいみや)・齋院(さいいん)は、佛(ほとけ)・經(きやう) 忌(い)ませたまふに、この
 - 5 齋院(さいいん)は、佛(ほとけ)・經(きやう)をさへ崇(あが)め申(まう)させたまひて、
 - 6 朝(あさ)ごとの御念誦(ごねんず)、欠(か)せたまはず、三尺(さんせき)の阿弥陀(あみだ)
 - 7 仏(ほとけ)に向(むか)かひまいらせさせたまひて、法華經(ほけきやう)
 - 8 を明け暮(あけくれ)れ誦(よ)ませ給(たま)けりと、人(ひと) 伝(た)へたり。
 - 9 賀茂祭(かもまつり)の日(ひ)、「一條(いちぢょう)の大路(おほぢ)に、そこら集(あ)ま
 - 10 りたる人(ひと)、さながらともに仏(ほとけ)に成(な)らん。」と誓(ちか)
- 【五丁ウ】(一四頁)
- 1 はせ給(たま)けるこそ、なをあさましく。さて、この世(よ)の
 - 2 御榮華(おんいば)を、ととのへさせたまはぬか。御禊(ごけじ)より
 - 3 はじめ、三日(さんじつ)の作法(さくぱ)、出(い)だし車(くるま)などのめでたき
 - 4 は。御心(ごこころ)様(さま)、御有(おんあ)様(さま)、大方(おほほう) 優(う)にらう(う)し
 - 5 くをはしましたるぞかし。宇治殿(うじのどの)の、兵衛佐(べいゑさ)に
 - 6 て御禊(ごけじ)の御前(ごまへ)せさせたまひたりけるに、いと
 - 7 幼(おと) くおはしませば、例(れい)は本院(ほんいん)に帰(か)らせ給(たま)て
 - 8 人(ひと)に禄(ろく)などたまはするを、これは河原(かはら)より
 - 9 出(い)でさせたまひしかば、思(おも)ひかけぬ事(こと)にて、

『大鏡』(日本古典文学大系21・一九六〇年・岩波書店 底本：東松本)

いつきの宮(みや)よにおほくおはしませど、

これはことにつぎなく、よにひさしくたまぢおはします。

たゞこの御(ご)一(いち)ずぢのかくさかへたまふべきとぞみ申。

むかしの齋宮(さいみや)・齋院(さいいん)は佛經(ほとけきやう)などのことはいませ給(たま)けれど、この

宮(みや)には佛法(ほとけのふた)をさへあがめ給(たま)て、

あさごとの御念誦(ごねんず)かゝせたまはず。ちかくは、この御寺(ごてら)のけふの講(こう)には、さだまりて

布施(ふせ)をこそはをくらせたまふぬ。いとゞうより神人(かみひと)にならせたまひて、いかでかゝ

る事(こと)をおほしめしよりけんとおほえさぶらふは

賀茂(かも)のまつりの日(ひ)、一條(いちぢょう)の大路(おほぢ)にそこらあつま

りたる人(ひと)さながらともにほとけとならむと、ちか

はせたまひけんこそ、なをあさましく侍(さむらい)れ。さりとして又、現世(げんせい)の

御榮花(おんいばな)をととのへさせたまはぬか。御禊(ごけじ)より

はじめ三箇日(さんかんにち)の作法(さくぱ)、出車(いだしくるま)などのめでたき、

おほかた御さまのいと優(う)に、らう(う)し

くおはしましたるぞ。いまの關白殿(せきはくどの)、兵衛佐(べいゑさ)に

て、御禊(ごけじ)に御前(ごまへ)せさせたまへりしに、いと

おさなくおはしませば、例(れい)は本院(ほんいん)にかへらせたまひて

人(ひと)に禄(ろく)などたまはするを、これは河原(かはら)より

いでさせたまひしかば、おもひかけぬ御事(ごこと)にて、

10 さる御心設けもなかりければ、御前に召し有て、
【六丁オ】（一五頁）

- 1 御対面せさせたまひて、たてまつりたりける
- 2 御小袿をぞ、かづけたてまつらせ給ける。入道
- 3 殿聞かせ給て、「いとをかしくもし給へるかな。祿な
- 4 からんも便なく、取りにやりたらむもほど経ぬべ
- 5 ければ、とりわき給へるさまを見せたまへる也。
- 6 えせ物は、え思ひよらじかし。」とぞ、殿は申させ
- 7 たまひける。

口語訳

今は昔、大齋院と申し上げる（方は、村上天皇の第十皇女でいらつしゃる。天皇が何度も何度もお替わりになられたが、この齋院は替わることがなくていらつしゃった。齋宮と齋院は仏像や経典を忌みお憚りになられたが、この齋院は仏像や経典までも敬い申し上げなきて、毎朝の御念誦をお欠かしにならず、三尺の阿弥陀仏に向かい申し上げなきて、『法華経』を朝夕にお誦みになつたと、人々が申し伝えてい（る）といことだ。

賀茂祭の日、「一条大路に多く集まつた人々は、そのまま皆私とともに仏に成りましよう。」と（大齋院が）誓願なされたことは、やはり驚くべきことであつた。そうはいつても、この現世での御栄華を欠けることなく備えていらつしやらないというわけではない。御禊の儀式をはじめとして、三が日の作法、出だし車などの何と見事なことか。お氣立てや振舞いが総じて優美な上に、品位ある円熟さがありであることよ。

さる御心まつけもなかりければ、御前にめしありて、

御対面などせさせたまひて、たてまつりたまへりける
小掛をぞかづけたてまつらせたまへりける。入道
殿きかせ給て、「いとをかしくもし給へるかな。祿な
からんもたよりなく、とりにやりたまはんもほどへぬべ
ければ、とりわきたるさまをみせたまふなめり。
えせものは、えおもひよらじかし」とぞ、申させ
たまひける。

宇治殿（頼通公）が、兵衛佐で御禊の前駆をなさつた時に、（宇治殿は）たいそう幼くていらつしゃつたため、（大齋院は）いつもは本院にお帰りになつて人々に祝儀などを下さるのだが、宇治殿が賀茂河原よりわが家にお戻りになつたので、それは予想もしなかつたことで、そのような準備もなかつたので、（宇治殿を）御前にお召しになつてお会いになり、身につけておられた御小袿を祝儀として、お授け申し上げなきて。そのことを入道殿（道長公）がお聞きになつて、「たいそう風情深いことをなさいましたね。祝儀を出さないのも不都合です」（本院へ）取りにやるにしても時間がかかつてしまつてしようから、特別のお志の程をお見せになつたものです。いい加減な心構えの人には思いつけないことですよ。」と、入道殿は（大齋院のことを）申し上げなきて。

表題

(おほさいゐんのと)
大齋院事 (第一)

右の訓みについて、二つの問題点がある。

その一は、「大齋院」と「事」を結ぶ助詞の問題である。

この表題の形式は、前半目録所収の四十六表題中、二十六表題共通の形式であり、それは、「人名(和歌作者) 事」の単純な語構成。その共通形式で問題となるのは、人名(和歌作者)を「事」字に続けてよむ場合、連体格助詞「の」でよむか、「が」でよむか、という問題である。それを決める第一の基準は説話本文の内部徴証であると考えられる。その類話や他資料を援用することも必要である。

ここで、説話本文にあらわれる人物で、目録表題にもみえる人物について、「の」「が」両助詞の使われ方をみると、その事例は、たとえば次のとおりである。(用例の傍線は筆者による。)

(和泉式部) ……「和泉式部がもとに」(二七〇フ)

「いづみしきぶがむすめ」(一九ウ4)

(伊勢大輔) ……「伊勢大輔のまこなりけり」(二三ウ4)

「伊勢大輔の御しそん」(三三ウ6)

(道 濟) ……「みちなりがは」(三六オ6)

「みちなりが哥」(三九ウ1)

人物ごとに、「の」「が」が区別して用いられている。そして、「の」助詞の用いられた人物には敬語表現があり、「が」助詞の用いられた人物には敬語表現が見られない。これをもとに、本集では、人物を受ける「の」「が」両助詞による尊卑表現の区別があると認められる。

「大齋院」について、対応する説話本文の表現に徴すると

「村上の十の宮におはします」(五オ2)

「この齋院は、佛・經をさへあがめ申させたまひて」(五オ5)

と敬語表現が顕著であり、類話等でも、

「大齋院ト申スハ、村上ノ天皇ノ御子ニ御マス、円融院天皇八御兄ニ御セバ、

其ノ御時ニ齋院ニ立セ給ヘル也」(新大系『今昔物語集』巻第十九第十七・P159)

「そのとゞまりおはします女宮こそは、大齋院よ」(大系『大鏡』第一巻・P51)

と、敬語表現が見られる。よって、表題の「大齋院」を受ける連体格助詞は「の」であると考えられる。

他の二十五表題についても同じ方法で、「の」「が」両助詞の区別をすべきである。「注釈」の中で、その都度示す。

その二は、「大齋院」の訓みの問題である。これまで、「だ(た)いさいゐん」「おほさいゐん」両様の訓みがあり、いずれが適切か明確ではなかった。この訓みについて論じられたものは、管見によれば一つのみ。すなわち、高田信敬氏の「大齋院名義考証」(創立三十周年記念 鶴見大学文学部論集、一九九三年三月)である。高田氏は、

「村上天皇の御むすめおほさいゐん」(源氏大鏡 一類 古典文庫508)

大齋院
「村上の天皇の御むすめおつさいゐん」(祐倫『光源氏一部調』)

等のいくつかの仮名表記事例を提示して、この訓みは中世から近世初期まで確実に行われ、今日「おほさいゐん」の訓みは少数派ではあるが、これを是とすべきである、とされる。今、この例示用例の意味を認め、現状では「おほさいゐん」とよむのが穏当であると判断する。なお、この件に関しては、語学的視点から改めて考察する必要があると考えられ、それは、別稿「接頭語『大』の訓みと語構成に関する一考察 鎌倉時代以前を中心に」(『人間文化研究』第十五号、長崎純心大学大学院人間文化研究科編・二〇一七年三月 掲載)に託した。併せて、参照された。

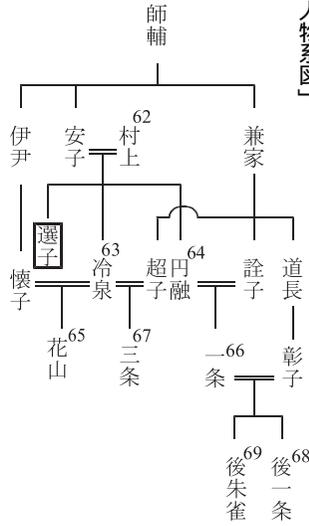
語釈・語法

【五丁オ】

1 今は昔いまはむかし 8 行目「人申伝へたり。」に呼応。「今は昔」に呼応する文末形式が、説話全体の末尾ではなく、途中に入った特殊な形。例えば、『今昔物語集』においては、全二〇五九話のほぼすべてが、「今昔」で始まり、「トナム語り伝へタルトヤ」と結ぶ語りの形式を持っているが、本集においては、全七十話すべてが「今は昔」と語り出しながら、末尾の形式は多種多様で、本集における語りの形式は形骸化していると認められる。詳しくは『古本説話集』研究上の諸問題（四）『大和物語』との類似性（一）人間文化研究 第十四号「長崎純心大学大学院人間文化研究科編・二〇一六年三月」を参照されたい。

1 大齋院おほさいいん（九六四丁一〇三五）選子内親王。村上天皇第十皇女。

「関係人物系図」



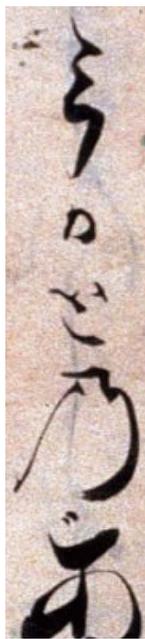
母は藤原師輔女の中宮安子。冷泉・円融天皇の同母妹。天延三年（九七五）、十二歳の時に齋院に立ち、第六十四代円融天皇より第六十八代後一条天皇に至る五代・五十七年にわたり、奉仕した。長元四年（一〇三三）退下、出家。同八年に薨去、七十二歳。『賀茂齋院記』等によれば選子が上東門院に、新

奇之草子』を所望したので、紫式部が『源氏物語』を書いたのだという。『発心和歌集』を編んだとも言われているが、異論もある（『発心和歌集』選子内親王作者説存疑）久保木秀夫・中古文学会編「中古文学」九十七号・二〇一六年六月参照。

本集には、第九・三十七・四十二・四十三話にも登場

1 村上むらかみ（九三六・六七）第六十二代天皇。天曆五年（九五〇）『万葉集』の訓釈および『古今集』に続く勅撰和歌集の編纂を目的とした和歌所を設置した。「天徳四年（九六〇）の内裏歌合』をはじめとする、村上天皇主催による多くの歌合が行われた。康保四年（九六七）五月二十五日、崩御。四十二歳。本集には、第三十九話にも登場

2 御門みかどの、『岩波文』は、「みかどの」の下の「」印は「普通誤脱の標示である。」とするが、筆のかすれとみる。『大鏡』本文とも対照して、ここは誤脱なしとみる。



（九） 國寶 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財 <http://www.ensuon.jp/top?Lang=ja>

本集の影印引用は、以下、すべて同じ。（一）

2 あまたあまたたたびび、替かははららせせ給給へへど、総索引『新大系』は、反転記号レ点を認め、「たび〜あまた」とよむ。『全註解』『全訳注』は、レ点は影印本では不明瞭として本文に反映させていない。「あまたたび〜」でも「たび〜あまた」でも意味するところは同じ。



2 せ給へど、「せ給ふ」は、最高敬語。「敬語の文学的考察 源氏物語の本性(其一)」(玉上琢彌・京都帝国大学国文学会編「国語国文」21(2)・一九五二年三月)に示されているとおり、帝に対する最高の敬意を指す。

3 齋院「齋院」は賀茂神社に奉仕した未婚の内親王・女王をいう。天皇の崩御・讓位の他、自身の父母の喪などの特別事由で退下した。

3 動きなくて 齋院の交代がなくて。

『日本紀略』には次の記事がある。

天延三年(九七五)六月廿五日丙寅、卜定賀茂齋王。先朝第十選子内親王也。

永観二年(九八四)九月五日壬子、齋院選子内親王依舊不改之由

寛和二年(九八六)八月八日乙辰、但賀茂齋院不改。

長和元年(一〇二二)四月十九日丙辰、賀茂齋院不改例

長元四年(一〇三二)九月廿二日丁卯、夜、賀茂齋院選子内親王依有老病、

私以退出

『御堂関白記』(長徳四:九九八〜寛仁五:一〇二二)には次の記事がある。

長和元年(一〇二二)四月廿三日、庚申、…略…明日可被申不替齋王由、

長和元年(一〇二二)四月廿四日、辛酉、…略…被申齋王不替由、

長和五年(一〇二六)二月廿五日、庚子、…略…不改齋院由奉。

4 齋宮・齋院「齋宮」は伊勢神宮に奉仕する未婚の内親王、または皇族の女性。「齋宮」「齋院」ともに、その方の居住した御所も指す。なお、齋宮・齋院ともに「齋王」と呼ぶ。

4 佛・經 五丁才6・7に「阿弥陀ほとけ」「法華經」と具体的に記述されているので、「ほとけ・ぎやう」とよむ。仏像と経典のこと。五丁才5の「佛・經」は「大鏡」では「佛法」となっている。

4 忌ませたまふに、齋王は、ひたすら神に奉仕する身で、仏教に帰依することはできず、不浄をあらわす言葉や、仏教に関した言葉を忌詞として避け

る生活を送っていた。『延喜式』には、齋院忌詞として「卷第六 神祇六 齋院司」に、「凡忌詞 死称真、病称息、泣称塩垂、血称汗、完称菌、打称撫、墓称壊」をあげる。それ以外に、齋宮には仏教に関する忌詞がある(巻第五 神祇五 齋宮)。当時の仏教的観点からは、齋宮・齋院に対して、「齋院罪ふかくなれど、をかし。」(新大系『枕草子』一本二五段・P.34)とあるように、「罪深い身」とされていた。「大鏡」に「いませ給けれど」とあることも勘案し、「」には逆接の接続助詞とみる。

5 佛・經をさへ 本集の地の文の「さへ」は「二例」「をさへ」の用例も本例のみ。あとは「我さへ」「そらさへ」「まつさへ」といずれも歌語にみえる。

5 崇め 『類聚名義抄』観智院本には「崇アカム」、図書寮本には「崇アカム」とあるので、「アカム」とよむ。

6 御念誦 仏の名号、あるいは経文を誦み上げること。『総索引』は「ねんす」「全書」「全註解」「全訳注」は「ねんじゆ」とする。『源氏物語』には、「念誦十二例」「御念誦三例をみる。「御ねんすなし給ふも」(新大系『源氏物語』二『須磨巻・P.38)、「御ねんすし給て」(新大系『源氏物語』二『明石巻・P.15)、「御念すのひま」には(新大系『源氏物語』四『橘姫巻・P.30)など、用例十五例はすべて「念(ねん)す」である。それも動案し、「ねんす」とよむ。

6 三尺 一尺は、約三〇・三センチメートル。字音シヤクの古い形。日本語の首韻体系の中で変化が生じているものとみて、「サカ」とよむ。『日本書紀』卷第廿四皇極三年夏六月の条に、「其葦長八尺」(岩崎本皇極紀平安中期古本)とある。また、『万葉集』卷第十六・三八二、「美麗物 何所不飽矣 坂門等之 角乃布久礼尔 四具比相尔計六」の左注に、「右、時有娘子。姓氏度氏也。(以下略)」「新大系『萬葉集』四」という記述がある。補注には、「第三

句の『坂門ら』は左注の『尺度氏』に当たる。「とあり、「尺」を「坂（さか）」と訓む傍証になる。

6 阿弥陀仏あみだぶつ 西方極楽浄土の主。この仏を信仰すると、臨終の際に來迎し、死後に極楽に迎えられると信じられた。阿弥陀如來、岡崎知子氏の『平安朝女流作家の研究』（大齋院選子の研究、法蔵館・一九六七年）によると、選子が賀茂齋院在職中に、阿弥陀仏に向かい、法華経を朝夕誦まれたといつことは、確かな記録にみえることではないが、選子の和歌として、『金葉集』（巻第十雜部下・六三〇）に「阿弥陀仏とななる声に夢さめて西へ流るる月をこそ見れば、詞花集」（巻第十雜部下・四一〇）に「思へとも忍むといはぬことなればそなたにむきて音をのみぞ泣く」（『古本説話集全注釈』第四十三には初句を「なをだにも」とする。）の歌によって、「選子内親王の信仰は法華経受持による西方願生であった」とする。

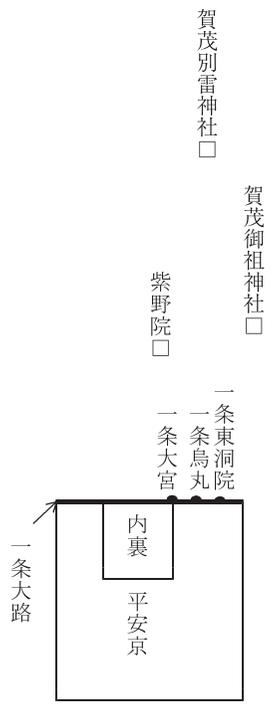
7 向かひまいらせたまひて、「まいらせ」の「い」は「ゐ」の仮名違い。本集には、動詞二十一例・補助動詞二十九例用いられているが、すべて「いで統一されている。

7 法華経ほっけ 『法華経』は、平安朝において一般に広く信仰された經典である。『更級日記』に、「夢に、いとよげなる僧の、黄なる地の袈裟きたるが来て、『法華経五巻を、とくならへ』といふを見れど」（『新大系』P.386）とある。八巻本の『法華経』第五巻提婆達多品は、女性の成仏を説くことで女性の支持を集めた。『王朝文化歴史大事典』（小町谷照彦、倉田実編・笠間書院・二〇二二年）「女人往生」の項に詳しい。

9 賀茂祭かもけい 京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭礼。古くは四月第二の酉の日、現在は五月十五日に行われる。葵の葉で牛車や簾、社殿や祭人の冠（葵簷）などを飾り、賀茂の家々の門にも葵をかけたので葵祭ともいう。弘仁元年（八一〇）齋院がおかれ、皇女有智子内親王が齋王になって以来、同祭に奉仕するようになった。祭に先だって、齋王

は賀茂川で禊を行い、祭当日は勅使および東宮、中宮の使いとともに行列を整え両社へ参向した。その行列は華麗を極め、多くの見物人が集まった。『延喜式』巻第六神祇六齋院司に詳しい記述がある。なお、『大鏡』には「賀茂のまつり」とあり、本集でも「の」を補読して「かものまつり」とよむ。

9 一条大路いちじょうだいぢう 平安京の最北端を東西に走る大路。『延喜左右京職式』の京程には、北極大路と記載されており、道幅については「広十丈」とあるが、同じ京程に「羅城外二丈」の記載もあり、『拾芥抄』では十二丈としている。明確な結論をみていないが、いずれにしても平安京の京域を画する大路である。一丈は、約三・三メートル。賀茂祭当日は、内裏から一条大路を東に向かう勅使一行と、紫野院から南に向かう齋院一行が一条大宮で合流し（路頭の儀）、賀茂御祖神社に向かい、賀茂別雷神社を経由して、翌日紫野院に帰院した。『源氏物語』葵巻にみえる賀茂祭の齋院の御禊に際しては、勅使の一人として若き光源氏が供奉していることもあって、一条大路の見物人が大変な数にのぼったと語られている。また、『栄花物語』巻第十三などに記載されているように、賀茂祭の時には、祭礼を見物するために多数の棧敷が貴族たちによって設けられていた。賀茂祭が賑わいを見せた平安中期から鎌倉時代にかけて、棧敷の設営地は、次第に一条大宮・一条烏丸・一条東洞院に固定化された。図示すれば、次のとおりである。



9 ところら 数や分量の多いさま。そんなにくさん。『平安女流文学のことば』(P.215・木之下正雄・至文堂・一九六八年)には、「ところら」は、女流文学用語で、中世では、この語は古典的な感じのことばになっっているとする。また、副詞として動詞を修飾するのが本来の用法とし、話し手から遠い第三者に関わる動詞を修飾するとされる。大斎院は人々から離れた場所にいるのである。10 さながらともにもに仏に成らん」と誓はせ給けるこそ、『法華経』化城喻品第七に「願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道(願はくは此の功德を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と 皆共に仏道を成せん)」とある。この偈は勤行の最後に唱える廻向文に用いられている。賀茂祭の当日、選子がこの偈文をもつて誓ったことの意味については、岡崎知子氏の『平安朝女流作家の研究』(前掲書・五才)、「阿弥陀仏」の項、「大斎院選子における神と仏」に詳しい。

【五丁ウ】

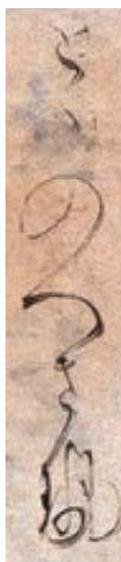
1 なをあさましく。本集には、「なほ」という正用の例はない。十五例すべて「なを」で統一されている。「あさましく」の下を読点にする考え方もあるが、『大鏡』「あさましく待れ」の例、本集五三丁ウ9、「いとくくちをしく」の例もあり、「あさましく」の下は、句点で文が切れるとみる。「あさまし」は、現代では悪い意味だけで使われるが、もともとは意外なことに驚いたりあきれたりする意が原義。よい場合にも悪い場合にも用いた。本集では二十五例用いられているが、仏の功德に関する場合はすべて、感動するなど、よい意味で用いられている。ここでは、大斎院の誓願に編著者は感動しているのである。

1 さて、「さて」は、『大鏡』の該当部分が「さりとして又」とあることから、逆接に用いる。前文の仏を信仰して後世の安楽を願うことに対して言う。本集には、「さて」も「は」も三十三例ある。大半は順接の意味だが、順接・

逆接いずれの解釈も可能な用例がある。確実に逆接の意味を持つ用例は、「かはらむとおもふいのちはをしからでさてもわかれむほどぞかなしき」(十七才1)である。なお、本話の文末部分「この世はめでたく心にくいふにて過ぎさせ給へるに、後の世いかと思ひまいらせし」(十一才2・3)はこの部分と対応していると考えられる。末尾の「は」は、第一話後半部の類話『今昔物語集』との対応本文「思ヒケルニ」から考えても逆接である。

2 御栄華 本集では、本例のみ。『大鏡』には「御栄花」とある。『色葉字類抄』前田本(三卷本)には、「榮華」(下巻八九才7)とある。「え」は、当時の字音仮名遣いでは一般的なものであろう。

2 ととのへさせたまはぬかは。「ととのふ」は、「欠けることなくすべて備わる」の意。一般に四段・下二段活用があるが、本集ではこの下二段用例一例のみ。『岩波文』では、「ととのへ」の下に挿入記号を入れるが、『総索引』で指摘されているように、筆のかすれと見る。おそらくは、筆の重みによるものである。「かは」は反語。



2 御禊 賀茂祭の前の午の日か未の日に行われた。「禊」とは、主に神道で、自分自身の身に穢れのあるときや、重大な神事などに従う前、またその最中に自分自身の身を清水、滝、河川や海水で洗い浄めることを言う。天皇・斎宮・斎院が神事の前に、賀茂川や桂川などで行った禊ぎを「御禊」とよんで、敬意を表した。本用例の「禊」の字体は、天治本『新撰字鏡』(天治本 新撰字鏡(増訂版)附享和本 群書類従本)にみえる。本集では、他に五丁ウ6に一例あるが、字体は「禊」である。

本集〔五ウ二〕



本集〔五ウ六〕



天治本『新撰字鏡』



3 三日の作法（三ノヒツノサシヨウ） 『大鏡』には、「三日」は「三箇日」とある。よって、こ
 こも「さんがにち」とよむ。「作法」の「法」は、入声。呉音「ホフ」・漢音
 「ハフ」で、古くは発音によって意味が異なっていた。混同し始めた中世末
 期の『ロドリゲス日本大文典』（一六〇三〇四）には、両者の違いが述べら
 れている。「ハフ」は、「ひろがる（開音）」で、法則・規定・命令や、主人が
 家来のために設けた規約を意味する場合に使用されるとし、「礼法」などの
 例を挙げる。一方「ホフ」は、「すばる（合音）」で、仏法上の教法や教義を
 意味する場合に使用されるとし、「妙法蓮華経」などの例を挙げる。「三日の
 作法」は、仏法上の教法ではないが、広く宗教上のきまりとみて、「さほふ」
 とよむ。なお、本集の「法」の仮名書き用例は、「ほつじ」（四ウウ4）、「そ
 のほつをならひて」（二〇ウウ）など十一例ある。いずれも「ほつ」である。
 令制では、国家の祭祀を禊の期間により、大祀・中祀・小祀に分けている。
 「大祀」は天皇即位時の大嘗祭だけで、一カ月の齋戒を伴っていた。「中祀」
 は賀茂祭などで、当日を含む三日間の齋戒があった。「小祀」は、鎮花・神
 衣・三枝・大忌・風神・道饗（みちあへ）・鎮火・相嘗（あひあへ）・鎮魂の諸祭で、当日だけの齋
 戒であった。

「三日の作法」とは、四月、中（なか）午（な）日（ひ）（不都合な場合は未の日）の齋院の御饗

中申日の賀茂下上両社による国祭 中西（なか）日（ひ）の本祭を指す。当日は、宮中の
 儀、路頭の儀、両社での神事である社頭の儀が行われた。

なお、『公事根源』七十七「関白賀茂詣」には「天禄二年九月廿六日摂政右
 大臣謙徳公かも詣之事有是摂関の人もままつての始なるへきそこのことはか
 ならずかも祭のまへの日ある事なり」とあり、中申日の国祭には天禄の頃から、
 摂政・関白が両社へ詣る。「摂関賀茂詣」が恒例となつたよつである。

3 出（い）だし（だ）し（し）車（くるま） 行幸・諸儀式・賀茂祭などに女官・女房たちの乗る牛車で、
 車の簾の下に衣の裾などを押し出して乗っているのをいう。

3 めでたきは。「めでたきは。」とある。『岩波文』『全書』以外は、「めでた
 きは」とするが、字形を検討の上、「き」と判読する。また、参照テキストト

すべて「は」の下を読点とするが、「は」の下を句点として、ここで文を切
 る。「めでたし」は、対象を社会的に公認された価値のある結構なもの、あ
 りがたい立派なものとして崇め、慶賀し、賞賛する気持をいう。神仏に関わ
 るものに用いられる例が多い。ここでは、「大齋院」の賀茂祭の神事に関わ
 る出来事・事柄が賞賛すべきさまであることを示す。本集では、本用例以外
 に三十六例ある。第一話には、本例を入れて六例、いずれも、大齋院に関す
 る事柄を褒め讃えている。

補説1

4 優（い）に（じ） 正用は、「いつ」である。本集には本例を含めて五例あるが、す
 べて「いふ」の表記である。意味は、めでたく足り整うていて、すぐれてい
 るさま。平安時代の理想的な性格を示す。「いふに」と次の「らうらうし」
 は並列の関係と見る。

4 らう（ら）う（う）しく 木之下正雄氏は「清音にも濁音にも読まれるが、豊語形
 容詞なので、清音である」とする。『平安女流文学のことは』p.72。『古典基礎
 語辞典』（大野晋・角川学芸出版・二〇一一年）は、「労勞じ」ととり、『労』に
 は、功勞や熟練、また、経験を重ねた人に見える行き届いた心遣いの意味が

あることから、ラウラウジは、することに心が行き届いているさま。気が利いて含蓄のあるさまに物事をこなしていく、よくできた練れた感じをいう。「とする。大齋院の心様・有様を総括的に讚美している表現である。本集ではこの一例のみ。

5 宇治殿 (九九一―一〇七四) 藤原頼通のこと。道長の第一男。後一条・後朱雀・後冷泉の三朝にわたり摂政・関白となり、父道長とともに藤原氏全盛時代を築いた。天喜元年(一〇五三) 宇治平等院鳳凰堂を建立、「宇治殿」と呼ばれた。本集には、本話のみに登場。

5 兵衛佐 左・右兵衛府の次官。「兵衛府」は、令制で、宮城の警衛や巡検、内裏外側の諸門の警備、行幸の警護などを任務とする左右の二府で構成された官司。官位は、延喜式制によれば、五位に相当する。

6 御前 「御前駆」の略。貴人の前駆。行列の威儀を整えるため、馬に乗って先導するものをいう。

補説2

6いと幼くおほはしませば 主語は「宇治殿。」(河原より) 出させたまひにかかる。「をさなし」が正用。本集には、本用例以外にも三例出現する。「をさなく」(六〇八)、「をさなかり」(二六ウ10)、「おさなく」(一四オ2)の「とくである。『大鏡』のこの部分は、「おさなく」である。いずれにせよ、「お」と「を」の混用が見られる。なお、大野晋氏は、「仮名遣の起源について」(東京大学国語国文学会編『国語と国文学』一九五〇年十二月号)の中で、「お」と「を」の使い分けの基準が、平安末期から鎌倉初期にかけての時期におけるアクセントの平声(低く平らかな発音)の首節と上声(高く平らかな発音)の首節との違いを書き分けているものであること、その書き分けは定家以前の古辞書『色葉字類抄』などにすでに見出され、定家は「この基準をこれらの文献から得たであろうこと、自筆本にその仮名遣いを実際に使用していること、鎌倉時代中期以降には、アクセントの歴史的变化の結果、この書き分けが乱れていったこと、」などを説明されている。

補説3

(一四)

7例は本院に帰らせ給て人々に禄などたまはするを、本集の「例は」の用例は「この一例のみ。他は」「れいならず」「れいならで」「れいの」「れいさまに」とある。「本院」は、齋院の御所のこと。紫野(上京区)の有栖川の傍らにある。この日、本院では祝儀を用意し、饗宴を設けた。『江家次第』巻六に詳しい。「例は本院に帰らせ給て人々に禄などたまはするを」は挿入句で「大齋院」について言ったことばである。

8 禄 「禄」は今でいう給料、俸給。朝廷の官人すべてが朝廷から賜る生活費。こつした給与とは別に、私的で臨時の褒美や祝儀を意味する用例も多く見られる。ここでは、後者の例であろう。

10 御心設け 心の準備・心つもり・心支度のこと。ここでは、大齋院の、宇治殿に対する禄の準備を指す。

10 御前 神仏や貴人の前を敬つていう。本集には、本例を入れて二十二例ある。「御前」十例、「御まへ」十一例、「おまへ」一例である。

10 召し有て 「有」は敬意を含む名詞を受けて、敬意の度の高い尊敬表現となる。おへになる。おへあそばす。おへなざる。山田孝雄氏は、『平家物語の語法』上(P951・宝文館・一九五四年)の中で、『アリ』は或は本来の存在の意義を以て、或は、汎く動詞の叙述の力のみを代表して、その上に来るところの名詞と相保合して一種の敬語となすことあり。『アリ』の用法を案ずるにその上に来るべき語が、特に尊敬の意を表はすものにあらざるものなる場合と、尊敬の意をあらはせる意のものなる場合とあり。而、その『アリ』の上に来るべき語は名詞なるあり。動詞の連用形を仮に体言としたるあり。動作作用の意ある漢語なるありとす。「とする。

【6丁オ】

1 御対面 きちんと顔と顔を向かい合わせて会うこと。

2 御小袿 重袿の上に唐衣を着て裳をつける女房装束の正装に次ぐ礼装。

補説2

的な事例として、「御禊」「三日の作法」「出だし車」を提示し、その素晴らしさを賞賛する気持ちで終助詞「は」（あるいは文末に「いかばかりかは」などの省略を考へる）で強調されている。「このように短文をたたみかけるように繋ぎ、続けて五丁ウ4・5「御心様 御有様ぞかし」で、「御心様」と「御有様」の両面にわたる大齋院の素晴らしさを「ぞかし」で念を押しまとめている。
 大齋院を称揚する文の流れとして、きわめて効果的な文構成になっている。なお、『大鏡』における文脈とは異なり、さらに大齋院賞賛の気持ちが強く表れている表現とみる。

補説2 字音語における韻尾の表記

1 五丁ウ6 御禊の御せむ(御前)

「前」字について、本集の表記事例は以下の十五例である。

- 【前裁】「せむざい」(ハオ4)・「前裁」(一七ウ6)・「前裁」(一五ウ6)
 - 【一前】「一前」(二七ウ4) 【大姫御前】「おおひめ御前」(三〇ウ6)
 - 【越前】「ゑちぜむのかみ」(三三ウ6)・「ゑちぜむのかみ」(三〇ウ6)・「越前の守」(三〇ウ8)・「ゑちぜむのかみ」(五三ウ10)
 - 「ゑちぜん」(八二オ10)・「越前」(八三オ10)
 - 「ゑちぜん」の國 (一〇四ウ10)
 - 【筑前】「ちくぜん」(八〇ウ2)
 - 【前司】「なにかしのせむじ」(四二ウ5)
 - 【御前】「御禊の御せむ」(五ウ6)
- 全十五例中、仮名書き用例は九例ある。内訳は「む」表記六例、「ん」表記三例である。本集の仮名書き表記は「む」表記が優勢である。
- 『色葉子類抄』前田本(三巻本)に記載されている、音表記のある十一語について、『類聚名義抄』も含めて、次表のとおり確認した。

【表の見方】 「/」斜線「欠巻・欠落」「x」語なし「」音読みなし

語	色葉字類抄		類聚名義抄
	前田本	黒川本	
前	三巻	二巻	観智院本 圖書寮本
前 駈	センクウ	センクウ	禾是ン
前妻	センセイ	センクウ	x
前裁	センサイ	センサイ	x
前途	セント	セント	x
最前	サイセン	サイセン	x
車前草	/	シャセン草	x
関前	セキセン	セキセン	x
筑前	チクセン	チクセン	x
肥前	ヒセン	チクセン	x
備前	ヒセン	ヒセン	x
豊前	/	フセン	x

「車前草」は「オ(ヲ)ホハ」と読ませて、オの植物の項目に記載されシの項目にはない。前田本(三巻本)は、オの項目が欠巻である。

『色葉字類抄』では、前田本(三巻本)の「関前」「豊前」以外は、「前」字をすべて「セン」と表記している。『類聚名義抄』観智院本には、「前 禾是ン」のみあり、「セム」の表記事例は図書寮本も含めてなし。また、『韻鏡』(『韻鏡 新釋』福永静哉・あそか書林・一九五五年)には「外転第二十三開、歯音、濁、先韻」(ien)とあり、「前」は「セン」と表記するのが正しい。辞書はほぼ正しく、「」表記。

そこで、頼通(道長一男)の場合を考えてみると、頼通は長保五年(一〇〇三)に十二歳で元服している。しかし、『御堂閑白記』にはこの年の記録はない。長徳五年(長保元・九九九)や長保二年(一〇〇〇)に頼通に関する記事があることや、他の子息の例からこの年の記録があれば、頼通元服の記事はあつて当然と考えられる。兵衛佐任官についても長保六年(寛弘元・一〇〇四)以降のことであればその記事もあつて当然で、それがないといつことは記録がない長保三年(一〇〇一)・長保四年(一〇〇二)・長保五年(一〇〇三)の頃と考えられる。元服以前の任官は不自然なので、元服の年に兵衛佐任官と齋院御禊の前駆が考えられる。「道長」の子息は倫子腹と明子腹があるが、倫子腹の頼通や教通のほうが優遇されたようである。教通は十一歳元服正五下侍従禁色に対して頼通は十二歳元服正五下禁色侍従で、一歳の年齢の差はあるものの、ほぼ同じ扱いである。また、教通は齋院御禊の前駆はしていないが、十二歳で右兵衛佐になっている。とすれば、頼通は十二歳元服の年に兵衛佐に任官し、齋院御禊の前駆をしたと考えることも可能である。

次に、十二歳を「いと幼く」とする点について、前例を検討する。

「女人年表」(本多伊平編『平安時代補任及び女人繪覽』笠間索引叢刊101・一九九九年所収)に、「貞元二年(九七七)四月十六日丙午 賀茂齋院選子内親王従大膳職 禊東河入紫野院今日凶会日也中納言為光為前駆」(紀略)とあるが、この時、「中納言為光」は三十六歳である。

『公卿補任』寛和三年(永延元・九八七)「従三位藤道長^三」の項に「永観二年(九八四)「道長」十九歳の時である。

この二例を考え、齋院御禊の前駆の役は年齢の高い者が務めた時期があつたことがわかる。ここから考えると、十二歳という年齢は「いと幼く」と言えるだろう。

以上のように考えると、該当部分は、十二歳で元服した頼通が兵衛佐に任官

(110)

し、齋院御禊の前駆の役をしたが、その役をやるには若すぎたと解釈できる。もし、この解釈が成立するならば、頼通が十二歳元服の年(長保五・一〇〇三)に、兵衛の佐に任官し賀茂齋院御禊の前駆の役を務めたという事柄は、本集のみが伝えることになる。

なお、「頼通の兵衛佐任官」という問題については、「長保のころのこと」(新潮日本古典集成『大鏡』第三師輔・p.135・頭注二・石川徹校注・二〇〇三年)、「頼通が右近少将に任せられた長保五年頃の話と解するならば、その年頼通は十一歳であるから、いとおさなくおはしませば」といつのと合致する(大系本・大鏡、p.456・第三巻補注二)という見方がある。

また、「いと幼くおはしませば」は誰のことかという問題については、大系本『大鏡』には、「いまの閑白殿」とあるため、それを「道長」とする説(傍書)などもあるが、前記補注には、「大鏡短観抄以下諸注はすべて、『いまの閑白殿』を頼通」としている。一方、本集では「宇治殿」となっており、「頼通」のことになる。大齋院は道長より二歳年長であることから、この場合「幼い」のは当然「頼通」である。『全訳注』の口語訳の項には、「宇治殿頼通公がまだ兵衛佐で、御禊の行列の前駆をなさつた時のこと、大齋院は御幼少だったので」(p.51)とあり、「大齋院」が「御幼少だった」としてある。しかし、語釈「本院」の項(p.53)では、「この話では頼通は幼いので本院には寄らず、賀茂河原から直接退出したことになる」とある。『新大系』でも「幼い」のは「頼通」と解釈してある。幼いのは頼通と解釈すべきである。

(二〇一六年十月十七日・受理)